

或る妄想患者の既知感様体験について

昭和38年9月17日受付

国立小諸療養所精神科
片桐 隆

Über das Bekanntheitsgefühl-ähnliche Erlebnis Eines Paranoiden

Takashi Katagiri
Komoro National Sanatorium

妄想殊に一次妄想を K. Jaspers は真性妄想と呼び、Gruhle は原発妄想と呼び、了解不能の体験とされている。かゝる妄想体験を一応「妄想とは、病的状態から発生した、訂正不可能な誤った観念・感情的確信である^①」と定義することが出来るものとする。この定義では幻覚に対して、「対象なき知覚である」というと同じく、単に妄想発見の一手段を言うに過ぎないのではないかと考えられる。

妄想についてのかゝる定義は勿論、原因についての見解も、現在尚、定まつたものがない。更には、各種各様の妄想成立に関する見解が、乱立しているのが現況である。

その様々の見解に根拠を与えるものとして、患者が述べる事実を正確に把握することは常に必要なことと考えられる。

私は、或る精神分裂病の患者について、特殊な発明妄想を認めた。この体験は外面的な標識によれば、妄想知覚と呼び得た^②。然し、この体験を更に追究した所、更に原発的な体験から、二次的に発生しているごとく考えられた。この発明妄想の発生形式が、妄想体験の解明に多少とも示唆を与えるものと思えるので、報告する。

症 例

○田○文、25才、男子

〔生活歴その他〕 満洲国奉天市内にて、医師の長男として生れた。小学校在学中に終戦をむかえ、兵士と共に内地に帰つた。父の転居と共に、長野県内を転々として移動した。その間、小・中学校を卒業し、成績は比較的優れていた。父が小諸市に定住する頃、上田高校に在学中であつた。上田高校3年頃に発病した。性格は内気・寡言・陰気で社交性乏しく、愚図であるが、素直・根気強く、情に脆いという。

家族歴は、父母共に健在であるが、父方叔父が一名借金を苦にし自殺した。同胞は4名で、いずれも健在

であり、血族内に精神病者はないという。

〔現病歴〕 昭和31年、高校3年在学中、自閉的になり、時に衝動的に乱暴することがあつた。当時主観的に「学校から帰つて来て、根をつめて勉強していた時、頭の中の器官が一度にガサツガサツと崩れたような、頭をがんと叩かれたような感じがした。その時に駄目だと思つた。その時から幻聴がきこえ出した。」という体験があつたという。後、横浜・上田市などの各精神病院に入院、入院期間は通計5年間。幻聴は消褪したが、体感の異常と心気症的訴え、無為・自閉症が残つていた。37年3月から心氣的訴え、発明妄想が現われ、当所に入所するに到つた。

〔現病像〕 体格中等大・肥っている。表情は少いが時に微笑し、疎通性は悪くない。言語は割に活潑である。動作も多少緩慢であるが異常はない。整つた服装をしている。訴える内容は、下記の如き妄想が主体をなすが、他に体感の異常、時に要素的幻聴を訴える。診断は精神分裂病である。

〔妄想について〕 患者の述べる異常体験を、表面的な質問で尋ねると、次の如く様々の内容をもつた妄想を述べる。「テレビを自分で発明したと思う、ジェット機も、原子力潜水艦も、自動車も造つたと思う、ソ連の金星ロケットも造つたと思う。ソ連のミサイルはまだ発表されていないが、径8米の丸い回転台の上に乗つていて、その台の上で3人で操作出来るように造つたと思う。近頃では人間を造つたような気がする。」「自分は満州からひきあげて来た。その、ひきあげ船の中にいた人達が、この病院に一杯いる。こゝの看護婦さんも子供の時、ブラブラしていた時に遇つたことがある。こゝのおじいさん(患者)にも遇つたことがある。生れた時風呂に入つた時見た。おじいさんに抱かれて風呂に入つた。倉島さん(患者)には終戦の時歩哨で立つていたのを見たおぼえがある。」これらの表明は、これだけならば前者は発明妄想であり、後者は人物誤認である。しかるに、この発明妄想、人物誤

認として訴えられるのが、如何なる理由によるのかを更に質問してみると、患者は次の如くのべる。

「自動車なら、自動車の新聞記事を見たとき（扉が観音開きになるのはいけないから横に開くようにしる）と何時か言ったということがバツと解かる。金星ロケットの新聞記事を見たら、造るのを指図したことを思い出す。ソ連のミサイルのことも新聞記事を見たとき憶い出す。新聞を見るまでは、そんなことはなかったが、新聞を見た時に初めて造ったということを憶い出す。中村さん（患者）には顔を見たときに、遇つたことがあるな、というかんじがした。そして曳上る時、貨物列車の中で見たということ、その時ポロポロの背広を着て、毛布を持つていたこと、その毛布に名前が書いてあつたのを思い出す。」

即ち、発明妄想も人物誤認も、発生の形式から言えば、新聞記事又は実在の人物を正しく知覚した後に、誤つた意味付けが行なわれているのであるから、妄想知覚^④と言える。然し、この誤つた意味付けの理由を更に追究質問すると、次の如く述べる。

「自動車の設計図を書いた。その設計図は憶えていない。書いたという感じがする。細まかな部分は良くわからないが、自動車なら自動車を見たときに、自分が造つたんだという感じが出てしまう。とにかく、何時か以前に自分がそれを造つたんだ、と感じてしまう。漫画本を見たときに、それは自分が書いたのだという感じがするのだ。自分がそれを書いたという感じだけは確信している。書いたものを今書いて見るといつも書けない。書いたという記憶じやない。書いたという感じがする。画を見ると勝手に、書いたという感じがして来る。感じ、書いたという感じは誰に反対されてもある。自分がやつたという感じなのだ。その感じがあつて、どこで何時書いたかとか、どこで誰に遇つたか、どこで発明したかということが、次第に憶い出されて来る。」

このように患者は、或る対象を知覚したときに、特種な（感じ）がすると繰返して述べる。更には又対象を知覚せずとも、この特種な（感じ）のみが突然起ることもあると述べる。

即ち、妄想知覚の誤つた意味付けの分節の原因となつているのが、この特種な（感じ）体験ではないかと思われる。私は、この特殊な（感じ）体験を更に追究して見た。

「漫画を書いたということではなく、まず何かの感じが、バツとするのだ。自分がやつたという感じなのだ。その（感じ）は記憶でもなく、信念と言うでもない。唯、感じとしか言えない。自分がやつたという

感じなのだ。自分がやつたという感じが強い。書いたことは忘れていてもある。」

即ち、この患者の（感じ）体験は、上に記した以上に追究することが出来なかつた。

この（感じ）体験が、患者の全く未知の対象について発生しうるか否か、又、その発現時間はどうかを調べるため、眼科用の直像眼底鏡を見せ（発明したことがあるかどうか）と質問してみた。

当初は「全然知らない、初めて見る。自分で造つたことはない」と述べ、40分後、問診の途中で再度同一の質問をすると「一寸変な気がしてきた。いやどうもちがう。造つたかどうかわからない」と述べ、50分後には「造つたような気がしだした」と述べた。更に24時間後には「人が造つて、自分が改良してやつた。それは電池をはめこむようにする所だ」と殆ど完全な妄想形成が見られた。

考 按

上記の妄想体験を、こゝで模式的に述べてみる。患者は或る対象を知覚する。或るいは対象の知覚なくして、或る特種な（感じ）体験が起る。この感じそのものは、過去に経験したという記憶的要素はなく、意味内容も極めて不明瞭でしかない。この（感じ）体験に対して、次の隙間に（過去に起つたことだ）という記憶的要素が附属する。次に時間的に多少緩慢に、定まつた過去の地点、事件の内容など妄想知覚としての明瞭な形態を取る。更に、これに事件の細部が附属して、発明妄想・人物誤認など詳細な観念へと発展する。時には、発明妄想を更に説明するための妄想加工が行なわれることがある。但し、これら、それぞれの体験は、それぞれ意味ある関連というのではなく、単に時間的に継続して発生するというのみである。

かゝる時間的経過を取る妄想発展の発端者は（感じ）体験である。それ故、この発端者としての（感じ）体験の特徴を総括してみる。

1. 正常体験と比較不能：患者の言によれば、追想でも信念でもないという。外的客観的空間に現われるのではなく、意味内容も確実なものはない。即ち、知覚ではない。又表象とも言えない。又感覚とも言えない。その他種々の正常体験と比較しても、類似した体験はないように思われる。

2. 発現時間は比較的短時間：多くの場合は瞬間的に、時には漸進的に発現する。発現後（過去の時点への結びつけ）は殆ど瞬間的に起る如くであつて、問診時に（感じ）体験と（過去への連結）の部分を分離してきゝ出すことは、時には困難であつた。それ故多く

の場合に(過去に経験したという感じ)或いは(既に知っているという感じ)として訴えられる。それ故に、この文頭に於いては、これをまとめて仮に既知感様体験と呼んだ。(過去への連結)以後の妄想内容の附属妄想加工等は多少緩慢である。

3. 実在の確信は、それに継続する妄想観念の部分に比し強い。即ち、附属する部分の妄想観念は、時には訂正することが出来たが、この(感じ)体験の部分は常に訂正不能であった。

かゝる(感じ)体験と類似した現象を、病的体験の中に探してみるならば、K. Jaspers は妄想の根元的体験として、一次的妄想体験をあげている。これは直接的に迫つて来る意味の知であつて、この一次的妄想体験の感覚材料によつて妄想知覚・妄想着想などと呼ぶといつている。この患者の(感じ)体験は、意味内容は不明瞭で、むしろ欠いているといつても良い程である。即ち(過去への連結)、(誤つた意味付け)は時間的に遅れて附属して来る。即ち、意味体験ではないという点で、Jaspers の言う一次的妄想体験とは異なつてゐるものと思われる。その他、様々な病的諸体験と比較しても、類似した体験は見当たらないように思われる。但し(感じ)体験の発生の形式上、突然、異常に大きな確信をもつて、意識野に出現するという点は、仮性幻聴の或る種のものに、類似しているかも知れない。それは「聴えるのでもない。考えるというのでもない。でも聞える」としか言い得ない感じがする。」

と或る分裂病患者が表現しているものである。然し、この類似性は今後症例について、更に追究すべき点であつて、確定し得ない。

或る妄想体験の内には、かゝる(感じ)体験が源となつてゐるのではないかと考えられる。又 Jaspers の言葉を借りるならば、かゝる(感じ)体験に妄想加工が行なわれて、妄想知覚・妄想着想として訴えられることがあり得ると考えられる。

総 括

以上、或る妄想体験を有する患者において認められた感じ体験、又は既知感様と呼ぶべき体験について述べた。その際に、この感じ体験の時間的发展経過・特徴などを述べ、更には他の妄想体験の中にも、かゝる体験が、端緒になり得ると考えられることを述べた。

文 献

- ①荻野恒一：妄想，異常心理学講座，第Ⅱ部，D 2. みすず書房，S. 29年6月10日発行。 ②K. Jaspers: Allgemeine Psychopathologie, 1959. Berlin. Springer-Verlag. ③K. Schneider: Klinische Psychopathologie. 5版. Stuttgart. 1959. ④J. Lange: Allgemeine Psychiatrie. (Kraepelin. Lehrbuch d. Psy). 1927. Leipzig. ⑤E. Bleuler: Dementia Praecox. Leipzig und Wien 1911.